

マーケット概況（2026年3月）

3月の債券相場は、米国とイスラエルによるイランへの軍事攻撃により中東情勢が不安定化したことを受け、10年381回債は前月末比-3.5bpの2.075%で取引を開始した。リスクオフから相場は買い進まれ、10年381回債の利回りは一時2.060%まで低下した。しかし、中東情勢の緊迫化から原油高によるインフレ懸念が意識され、その後相場は急速に上げ幅を縮小した。3日の10年債、5日の30年債入札を無難に通過したものの相場は反落に転じ、その後下げ幅を拡大した。原油高が一服すると下値が底堅くなる場面もあったが、ホルムズ海峡の事実上の封鎖が長期化するとの見方などから原油価格が急騰すると、再び売りが優勢となった。19日に行われた日銀金融政策決定会合では市場の予想通り政策金利が据え置かれ、相場への影響は限定的であった。高止まりする原油価格を背景に、米国を始め世界各国で利上げ観測が浮上するなか、国内でも早期利上げへの思惑から中期債の利回りが急上昇した。27日に2年482回債の利回りが1.380%と約31年ぶりの水準まで上昇し、5年183回債は1.820%と発行開始以来の最高利回りを記録した。30日には10年381回債の利回りが2.390%と約27年ぶりの水準まで上昇し、20、30、40年の各カレント債も当月の安値を付けた。月末はやや買い戻され、結局、10年381回債の利回りは2.345%で今月の取引を終えた。

<短国市場>

3月の短国市場は、前月に引き続き4月利上げ織り込みが進むなかで、中東情勢の混乱が長引いたことから、さらなるインフレ懸念が高まったため、3Mゾーンを中心に金利上昇した。6日の3M1366回債入札は最高落札利回り0.7756%、9日の6M1367回債入札は0.8726%で共に前回並みだったが、中東情勢の混乱収束が見えないことからインフレ懸念が高まり、13日の3M1368回債入札は0.7796%、18日の3M1370回債入札は0.8199%と入札毎に金利上昇した。19日の日銀金融政策決定会合は現状維持だったが、月末にかけては利上げペース加速が意識され、27日の3M1371回債入札では0.8561%となり、3M金利は月間を通して約10.0bp程度金利上昇し、1995年以来的の水準で今月を終えた。

<一般債市場>

3月の定例地方債は、前月比横ばいの10年債が国債カーブ対比+12bpとなり、5年債が国債カーブ対比+9bpの条件決定となった。3月の定例地方債10年債は2,705億円、5年債は790億円の発行となった。前年比で10年債は1,000億円減少、5年債は60億円減少した。表面利率は、2月に引き続き2.30%前後と高い水準を保った。10年定例政保債は前月比横ばいの国債カーブ対比+10bpの条件決定となり、政保債・地方債スプレッドは2bpが継続した。3月の事業債の発行額は、大型起債であったみずほフィナンシャルグループ債の計1,900億円や5年ヒューリック債の850億円、5年中日本高速道路債の850億円などが寄与し、払込日ベースで計8,344億円(39銘柄)となった。

◎ 主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#381	2.075(2日)	2.060(2日)	2.390(30日)	2.345(31日)
#380	2.100(2日)	2.065(2日)	2.395(27日)	2.360(31日)
#371	1.920(3日)	1.900(4日)	2.185(27日)	2.155(31日)
#183(5Y)	1.535(2日)	1.530(2日)	1.820(27日)	1.770(31日)
#195(20Y)	2.895(2日)	2.880(2日)	3.305(30日)	3.280(31日)
#1361-#1367 TDB(6M)	0.850(5日)	0.850(5日)	0.910(26日)	0.900(30日)
#1365-#1371 TDB(3M)	0.750(4日)	0.740(9日)	0.850(31日)	0.845(31日)